

◀ 書 評 ▶

R. M. Bohnstedt 著
北村 精一・徳永信三 訳

内臓疾患と皮膚病変

横浜市大皮膚科 野 口 義 岡

近代皮膚科学の特色の1つは、その精細かつ巧緻を極める皮疹の記載であろう。皮疹の描写に拘泥すれば形而上学的考え方に終始し、記載皮膚科学の異名を甘受するのも当然のことである。

その出発から独仏の影響が強かったわが国の皮膚科学は、時に文学的余韻を残すが、戦時中の長い空白とヌーベル・バーグというべきアメリカ皮膚科学の浸透により、徐々にその姿を変えつつある。例えば皮膚の症状や病変を全身との関連において考察するといった傾向は、新しい皮膚科学への脱皮の過程と考えてよいであろう。

重厚堅実を伝統として誇る独乙皮膚科学も、このヌーベル・バーグの影響に対して無縁ではあり得ない。実にこの時点で、記載形態学への反省と広い視野からの観察という意図を持って上梓されたのが R. F. Bohnstedt 教授の名著「内臓疾患と皮膚病変」(邦訳名)である。本書が紹介されて以来、わが国でも洛陽の紙価を高めたが、日常多忙な臨床医家のため訳本の刊行が渴仰された。その意味で日本版の上梓は昊天の慈雨であり、また訳者のご苦心に対して心から敬意を表するものである。

扨て訳者の北村精一名誉教授(長崎大学、現国立静岡病院院長)は著名の碩学、皮膚科学は勿論のことアレルギー学、真菌学および熱帯医学等の分野の先覚として知らぬ人はな

い。共訳者の徳永信三博士(東京国立第2病院皮膚科)は北村門下の俊秀、特に独乙語に対する造詣の深さについて定評がある。

原著 *Krankheitssymptome an der Haut in Beziehung zu Störungen anderer Organe mit differentialdiagnostischen Tabellen* (第2版, 1965) は索引を含み 280 頁、これが流麗な日本語に訳述され 247 頁に纏められている。訳者の苦心は文章だけに対してではない。Bohnstedt 教授の快諾を得て、挿入の写真はカラーを含み(152 葉) 全て原板を使用したのもその1例である。

原著者も訳者も共に序文で強調しているように、その狙いは皮膚病変と内臓疾患との相互関係を浮彫にすることである。北村教授の名言を借用すれば皮膚のうらおもてを極めることで、取りも直さずこれは皮膚科の進むべき道を示唆するものである。

原著では冒頭から独乙書の型を破り、皮膚病変と内臓疾患との関係が表解式に纏められ、しかも色頁(水色および黄色)の上に刷られている。これは読者に見やすくするための配慮であるが、訳著ではそれがそのまま忠実に取り入れられている。例えば水色の頁には内臓疾患の際皮膚、あるいは口腔粘膜に出現する皮膚の主要症状が列挙され(計11頁)、黄色の頁には内臓疾患と皮膚症状相互の関係が挙げられている(計10

頁)。尚、前記の内主要疾患、症状乃至項目には、本文中の記載場所を示す頁類が附されているので、索引的役割も充分果たしている。

ところで本文 212 頁中には19の主題が盛られている。即ち I. 感染性皮膚疾患; II. アレルギー性およびパラアレルギー性皮膚病変; III. 中毒性皮膚病変; IV. 光線・放射線性皮膚病変; V. 代謝障害の際の皮膚病変; VI. ビタミン欠乏性および栄養障害性皮膚病変; VII. 内分泌障害および妊娠時皮膚病変; VIII. 尋常性乾癬・関節炎性乾癬; IX. 扁平紅色苔癬; X. 皮膚出血現象; XI. 末梢血流障害の際の皮膚病変; XII. 血液・リンパ球造成系および細網組織球系疾患の皮膚病変; XIII. 肉芽腫性皮膚病変; XIV. 内臓悪性腫瘍の際の皮膚病変; XV. 異形成の皮膚病変(母斑等) XVI. 皮膚附属器に出現する疾患症状; XVII. 色素異常症と皮膚変色症; XVIII. 皮膚と神経系に現われる症状の相互関係; XIX. 口腔粘膜に現われる疾病症状がそれで、各項末には文献が附されている。

簡潔な名訳と鮮明な写真とが主題の内容を明快に説明しているが、これ程原著者と訳者の意気の合った訳著は少ない。これこそ明日の皮膚科学に関心を持たれる臨床諸家に是非共お薦めしたい名著である。

B 5 判, 頁 263,

写真 127, 原色図 29.

1967 年 ¥ 5,600 円 200

医学書院